

12月7日

主教教会博士アンブロシウス

Ambrosius

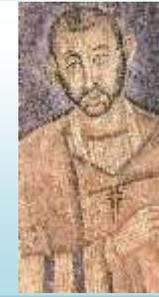
(334~397.4.4)

~四大教会博士の一人~

アンブロシウスはミラノの司教（主教）で、西方教会の確立に貢献した人物の一人です。彼はガリア（現フランス）の総督をしていた父のもと、トリニアで生まれました。そして父が亡くなった後、母とともにローマに行き、修辞学と法律学を学びます。

370年に、アンブロシウスはミラノの執政官（県知事）になります。そのころミラノの司教が死去したのですが、後継者をどの派閥から出すかでミラノは大もめにもめました。アンブロシウスは其中で、平静を保ち、群衆に対して毅然と接していきます。その彼を見た群衆は、アンブロシウスをミラノの次期司教に、と叫びながら、彼を司教に推薦しました。しかし彼は洗礼を受けていませんでした。そのこともあって、必死で断り、逃げ回っていましたが、とうとう断り切れず、374年11月30日に洗礼を受け、そのわずか八日後に司教となりました。

司教となった彼は、ミラノの宮廷の圧力に屈せず、教会の自立性を強く主張していきます。例えば元老院にあった勝利の女神の祭壇と像をグラティアヌス帝に撤去させ、また皇帝テオドシウスに対しては、大量の市民を殺害したことについて懺悔を迫りました。テオドシウス帝はこれを受け、八ヶ月間教会の門の前に立って、貧しい



「アンブロシウスの

モザイク画」

聖アンブロシウス教会(ミラノ)

服を着て、祈りと断食の時を過ごしたと言われます。

またアンブロシウスは神学者として、ギリシア教父の神学を専門に学び、東方のアレクサンドリア学派の聖書解釈を西方教会に紹介していきます。また彼自身も聖書解釈を行い、説教や禁欲生活を通じて多くの人々に影響を与えていきました。特にアウグスティヌスは彼によって回心したと伝えられています。

また「皇帝は教会の中にあり、教会の上にはない」と皇帝教皇主義を批判しました。そのため皇帝に圧力を受けますが、大勢で教会に立てこもっている間に多くの賛美歌をつくりました。また礼拝の重要性を説き、ミサという語を始めて礼拝のために用いた人物でもあります。

<特禱>

全能の神よ、あなたは主のしもべ、主教教会博士アンブロシウスの教えによって公会を照らして下さいました。どうか天の恵みをもって公会をますます豊かにし、忠実な証びとを起して下さい。その生活と教えに倣い、わたしたちがすべての人に救いの真理を宣べ伝えることができますように、主イエス・キリストによってお願いいたします。
アーメン